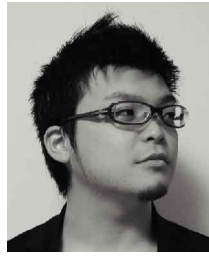


優秀賞



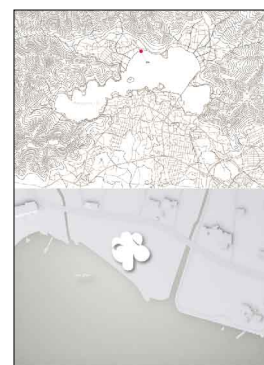
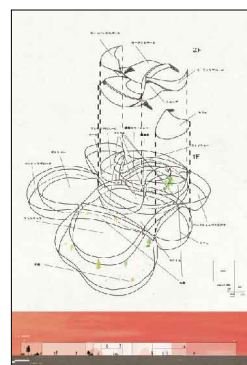
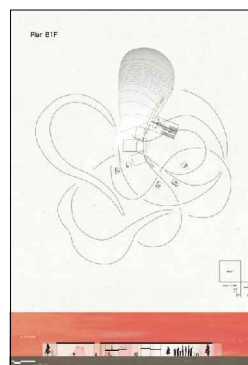
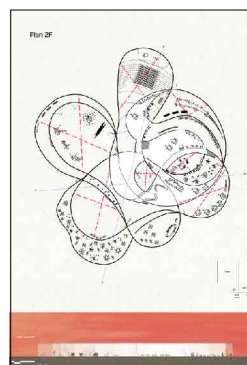
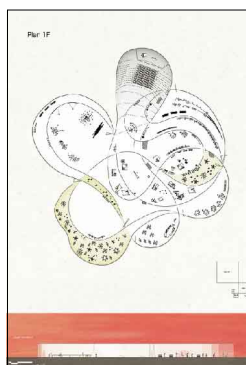
或いは奥という名の消失

村山 圭 (むらやま けい)

東京理科大学 理工学部 建築学科

白くぼやけた壁の向こうで、見えた人影が次の瞬間、赤い色を帯び、私の方に近づいてきている
私もその建物の奥へと進もうとするが、私の動きに合わせて奥が変化し、その人との距離が近づいているのかわからなくなる
少しうつむいて歩いた後、次の瞬間に現れたのは赤い服を着た女の子だった
透明な質の一枚越しに見える風景と、その積層によってもたらされた白濁した奥の空間の消失

湾曲したその質もたらず、様々な動線の流れと歪みと時の変化による距離感の違い
これによって、訪れた人々は距離感を狂わされ、その体験に引き込まれていく
人はただ、白くぼやけていくことと、私とあなたの距離の歪みを記憶する
人と人の動きによって、この建築はいきていく
遠くの方で音楽が聞こえ、はっとしたときにアートと出会う、そんな体験を期待して



【講評】刻々と移ろう霧に包まれた幻想的な原体験を具現化する試み。白濁する空間や領域を認識させるのは、自分と見え隠れする人々との関係性。それぞれの動きにつれ情景が変化する。それを季節や気象の移ろいが増幅する。光の中で模型をのぞきみると提案したいことが伝わってくる。音楽・美術を育み、発信する場の設定もいい。大いに想像力を喚起するだろう。長く暖めてきた心象風景を、卒

業制作として美しく昇華させた意味は大きく、着実な成長を期待したい。今後の課題として、イメージ表現で留めた物足りなさを指摘する声に対し、本物の空間、素材、ディテールで応えてくれることを楽しみにしている。それは十分可能なはずである。

(審査員：柳瀬寛夫)